

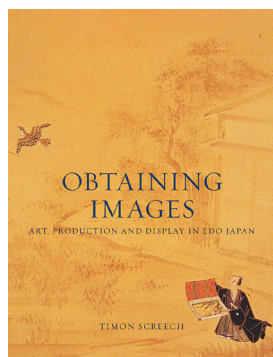
タイモン・スクリーチ著

『絵画の獲得——江戸における技、生産、展示』

Timon Screech. *Obtaining Images: Art, Production and Display in Edo Japan.*

University of Hawai'i Press, 2012

ブライアン・ダウドル



ロンドン大学アジア・アフリカ研究院美術史教授であるタイモン・スクリーチ氏の著書 *Obtaining Images* では、今まで軽んじられてきた、江戸時代（一六〇〇—一八六八）における文物の生産と様々な芸術分野・画派との関連性が明らかにされている。特定の画派や絵師について詳述している研究は数多くみられるが、焦点を狭い範囲に絞ったこのような考察では、スクリーチ氏の著作にあるような形で、江戸文化にみられる相关性を明らかにすることはできない。しかし、まさにこうした点が、*Obtaining Images* が異彩を放つところである。本書はあまりに多くの形式や画派に触れており、また重要な絵師や画派について十分に語りつくしていないため、この俯瞰的なアプローチに少々物足りなさを感じる読者

の中にはいるかもしれない。にもかかわらず、最終的には、相关性がより一層明らかとなった絵画制作と流通の現場を背景として、一人ひとりの絵師や各画派を見直すことのできる確かな基盤が築かれているのだ。

題名にある“obtaining”という言葉には、二つのつながりのある定義がある。一つ目の定義は、絵画の入手や買い取りといった消費を通じた“obtaining”であり、本書はこの意味に即して、人々がなぜ絵画を入手したかについて解説している。そして、一方では消費者とパトロン、また他方では絵師とプロデューサーとの交流といった、制作市場に関心を抱く読者にとつて興味深い事柄を仔細に取り上げており、「発注から指示、支払い、そして支払いの受

取り」までの流れにみられる交流をたどっている。このように、江戸の美術史を抽象的な理想美から現実世界へと立ち返らせるスクリーチ氏の研究は、階級、性別、血族関係、そして宗教的地位などの様々な要因が、どのように各個人の絵画の入手に影響を与えたかということ明らかにしている。

二つ目の“obtaining”の定義は、絵画がいかにして意味を獲得し、「通用するもの」となり、また「受け入れられ、理解された意味」（七頁）を伝えるかということに関係している。つまりこの研究は、人々がどのようにイメージを「理解」し、その意味を引き出したのか——制作された時点、そして最初に消費された時点で絵画をどのように読み、理解したか——を示しているのだ。スクリーチ氏が述べているように、この本は「絵画の視覚外の側面を真摯に捉えよう」としている。本書は、そもそも日本における絵画というものは、視覚性や鑑賞するといった行為を「主な目的」とするものでなく、むしろ鑑賞する以外の目的を持つて創られ流通したのではないかという、美術史としては大胆な仮説に始まる。氏は、イメージがいかにして「品々を交換することによって、また季節に伴うものとして、そして祈りや遊びの付属品として」、あるいは目の前で繰り広げられる主要な行事の背景として（七頁）意味を獲得していったのかを例証している。

本書は、互いに補完し合う二部に分かれている。最初の四章で

は、教養ある江戸つ子が絵を読み解き、入手する際に用いた基礎的な知識を紹介している。理想の芸術的表象やそれに対する考え方、記号化されたさまざまな吉祥のイメージが持つ意味合い（鹿、鯉、虎、竜など）、絵師との交流や絵画の支払いにおける典型的な礼儀作法、そして最後には、絵画の宗教的な意味合いや効果といったトピックが網羅されている。人物や出来事、絵画が、逸話を交えつつ紹介されており、その膨大な数に、専門外の読者は圧倒されてしまうかもしれない。しかし、この一見万華鏡のように目まぐるしく変化する異なるイメージの数々が、各章の結びまでに納得のいくまとまりを持った総体へと変化するのだ。第五章「第十章から成る本書の第二部では、第一部で提示された基礎知識が、より広く知られた江戸時代的美術制作の側面に関する興味深い研究に取り入れられており、狩野派や肖像画、国内の風景画、理想化された中国の景観（南画）、浮世絵、そしてヨーロッパ絵画との交流に関する章が収められている。

美術史書は必然的にその美的価値が問われるものだが、この点においても、*Obtaining Images* は成功を収めている。美しく作られたこの本には、ほとんどのページにカラー画像が刷り込まれている。しかし、本書での絵画の扱いについて、些細ではあるが、二つほど不十分な点について触れておきたい。一つは、イメージの注記に寸法が記されていないため、とくに時折大きな掛物とそれ

よりも遥かに小さな絵との見分けがつかないときなど、個々の絵の大きさを、他と比較しながら把握することが難しい、ということである。

そして、二つ目の問題点としては、絵画の視覚的要素を説明する（とりわけ吉祥のイメージや視覚上・言語上の語呂合わせを明らかにする）という途方もない作業を成し遂げているにも関わらず、氏が絵画に刻まれている、あるいは記されている全文（特に詩歌）をたびたび省略しているという点だ。各絵の署名や落款、そして制作日が几帳面に列記されているにも関わらず、長めの詩や物語が何度も検証されずに終わっている。スクリーチ氏は、「文章の役割が、図像の役割と同等、あるいはそれを上回る領域」である書と絵草子を割愛するとしているが、これは理にかなった判断だと思われる。総頁数が三三四頁、そして章の数が十章にもものぼる本書は、ひとつのプロジェクトに期待できる以上のものを網羅しているのだ。とは言っても、この判断はある仮説、本書がまさに論破している仮説——イメージとそれを取り巻く広い文脈（文章を含む）はそれぞれ切り離すことができ、またその役割を別々に考察できるものだ——という考え——を、前提とするものだ。

もともと文学者である私は、この本が絵画の視覚的コードを、全体性をもって「読む」必要性を、分かりやすく、かつ説得力を持って伝えていると感じたが、一方で誠に勝手ながら、著者が絵

画と言葉とをさらに対話させるようにしてくれていたならば、という箇所がいくつか見受けられた。美術史では、時折、絵画のみに過度な焦点をあてることがある。そして、残念ながら文学研究でもそれは同じで、言葉に過度な焦点があたることがある。氏がその序文で述べているように、「多くの日本画では文学テーマを描写する巻物形式がとられた。……絵を適切に理解するには、その根底にある物語、また、それを書き綴るのに用いられた書体の意味するもの、姿形のニュアンスを知る必要がある」（九頁）のだ。私は、本書の質や、スクリーチ氏の研究方法そのものを批判しようとしているのではない。むしろ、*Obtaining Images* は、学識というものが今後いかに美術史と、文学を含むその他の文物との間にあるこの人為的な境界を、乗り越えていくべきかを示しているものと考えている。本書は、絵画を入手・獲得する経緯やその理由への理解を深めるために、当時の絵画を構成する言語的・視覚的側面をいかにして併せ読むことができるかということを、様々な形で示している。江戸時代の文化に関心を持つ全ての研究者、そして学生たち（とりわけ文学研究者たち）に、本書を強くお薦めしたい。

* 本稿は、*Japan Review* No. 28 (2015) に掲載された英文テキストの日本語訳である（片岡真伊 訳）。